

令和3年度中学校武道授業（相撲）指導法研究事業



令和3年度中学校武道授業（相撲）指導法研究事業（主催＝日本武道館、日本相撲連盟、後援＝スポーツ庁）は1月15～16日の2日間、日本武道館大会議室において研究者8名が参加して行われた。本事業は、中学校武道必修化の充実に向け、指導計画、指導内容、指導法、評価等について、教育効果の上がる武道・相撲授業の研究を目的とし、昨年11月に開催された第8回全国相撲指導者研修会の成果と次回に向けての課題などを中心に協議が行われた。

■ 1日目（1月15日）

開講式では、はじめに安井和男^{やすいかずお}日本相撲連盟専務理事、吉川英夫^{よしかわひでお}日本武道館理事・事務局長がそれぞれ主催者挨拶を、次に桑森真介^{くわもりまさすけ}研究者が研究者を代表して挨拶を述べた。

開講式の後、満留久摩^{みつどめきゆうま}研究者の司会・進行のもと、昨年11月に行われた第8回全国相撲指導者研修会の講義や実践研究について振り返りを行うと共に、次回に向けて検討・協議を重ね、以下の方向性が固まった。

- ① 指導法概論は、複数回参加者にとって、同じような内容になってしまうため、安全に関する内容は他の時間に回し、相撲の基本動作で最も重要な下からの押し上げのメカニズムに関する話を入れる。
- ② 安全管理・指導は、毎回、新たな内容を一つ入れているので、それは継続しつつ、今後はパワハラや体罰に関する話題も盛り込む。
- ③ 実技研修について、基本動作の動画紹介は経験者にとって退屈かもしれないので、事前に日相連HPで各自予習してもらい、簡易相撲や相撲遊びをアイスブレイキングに取り入れる。また、講師と

の触れ合いを求める受講生もいるので、質問コーナーや質問箱を設けて、交流の場を確保する。

- ④ 審判法では、簡易試合で度が過ぎたガッツポーズをしていた者がいたので、授業の指導につなげるという視点を常に意識して行うように指導する。また、審判役に対しても、注意を促すことの必要性を最初に指示する。

以上の内容を確認した後、1日目の最後は、桑森研究者から、特別な支援を要する生徒に対する相撲指導の実践について、山梨県富士吉田市立下吉田中学校の廣瀬理奈^{ひろせりな}教諭に対して行った聞き取り調査が紹介され、障がい者スポーツ、障がい者教育としての相撲の可能性を探った。

■ 2日目（1月16日）

前日に引き続き、満留研究者の司会・進行のもと、指導計画や指導案作成、指導の実践と観察（模擬授業）を中心に検討が行われた。

南和文^{みなみかずふみ}日本相撲連盟会長による安全管理・指導は、次回も是非、お願いしたい。実践事例紹介についても、受講生の感想文から大変有意義なものであったとの声が多かったので、引き続き実施したい。

指導案作成については、発表の順序をくじ引きで決め、各班のテーマは、段階を意識していくつかの選択肢を作成してはどうか。授業者（T1）は、学生ではなく教員の方が良いのではないかと。各班の代表は、はじめの段階で明確に決めておくことが重要でないかなど、活発な意見が出された。

また、研修期間中の生活面についても触れ、道場に入る際に履物の整頓が出来ていないので、この機会に武道指導者としての意識を高めてもらうことや、新型コロナウイルスが収束した暁には、ちゃんこ鍋を囲んで講師・参加者全員で交流会を再開することを確認した。

最後に、次回の実践事例発表者の候補を検討した後、開講式では、浦嶋三郎^{うらしまさぶろう}日本相撲連盟参事が研究者を代表して講評を、篠寄浩之^{しのぎひろゆき}日本武道館振興部副参事兼普及課長が主催者挨拶をそれぞれ述べ、本研究協議事業の日程が終了した。